

平成二十六年 学位請求論文（課程博士）

法然上人「十七条御法語」の研究
― 伝承と展開の背景 ―
（論文要旨）

大正大学大学院仏教学研究科仏教学専攻 研究生

長尾隆寛

本論は「法然上人「十七条御法語」の研究―伝承と展開の背景―」と題し、法然上人（以下、敬称を省略）の遺文集として伝わる『西方指南抄』所収の「十七条御法語」について、一々の御法語がどのような経緯を経て「十七条御法語」としてまとめられたのか、その伝承を明らかにし、同時にそれに伴う諸問題を解決することを目的とする。

従来の法然御法語研究は、法然の思想を明らかにするための証左として内容を検討することや、法然の教義書・遺文集・伝記類のなかでの比較検討による書誌的研究、思想研究等々が中心であり、『選択集』や『黒谷上人語灯録』（以下、『語灯録』とする）等に説かれていない内容や、疑わしい内容は偽撰と判断される傾向にあった。これは、田村圓澄氏をはじめとする多くの先学が用いる、御法語の真偽判断基準である¹。

書誌的研究においては、中野正明氏により遺文が原型からどのように踏襲、改変されながら伝記類へと伝わっていくのかという問題意識のもと、諸本や遺文集・伝記類との比較によって詳細に考察され、遺文集の書誌学に一定の基準が設けられた²。本論も中野説によるところが多い。しかし、氏の研究のように遺文集全体を対象とするのではなく、一つの遺文に絞って思想をふまえてみていくことで明らかにすることもあると考える。

御法語の真偽も本論において重要な問題である。田村氏のように御法語と教義書の思想を比較するのみで真偽を判断するのではなく、一つ一つの御法語には『選択集』等とは異なった、複雑な背景があることに注意すべきである。本論は真偽を確定することの重要性もふまえて、これまでの偽撰説に対し、別の視点があることを提示した。

また、御法語の伝承に関する研究では、法然門下やさまざまな諸師の著作まで範囲を広げ、そこに説かれる人物関係等の背景をふまえたうえで考察された研究は少なく、藤堂恭俊氏、永井隆正氏の研究があるのみである³。両氏の研究は何れも詳細な研究ではあるが、個々の御法語を扱うものであって、遺文全体を考察したものではない。したがって、一つの遺文を全体的に考察することにより、一つの御法語だけではみえてこない伝承背景が明確になり、従来の個々の御法語のみによる研究成果は、大幅な見直しが必要となることになる。

以上のような問題意識のもと、本論においては十七条各条について、はじめに内容解釈と問題提起を行い、法然教学との比較によって「十七条御法語」伝承の正統性や法然の思想について考察した。そのうえで、法然門下の著作や『語灯録』、『四十八巻伝』や『明義進行集』・『広疑瑞決集』等との比較によって判明する成立背景をもとに伝承について言及した。

第一章では、はじめに「十七条御法語」に関わる三つの問題点について検討した。「題名」・「説示順序」・「内容」の三点である。「題名」については、親鸞真筆本や版本、『昭法全』の段落分けとは異なる筆者の見解を提示したうえで、全部で十七条になることを示し、題名は「十七条御法語」として間違いがないことを明らかにした。次にその段落分けに基づいて各条を概観し、説示内容が起行論・教判論・安心論・作業論に大きく分けられることや、十七条のうち、大半の御法語が信瑞の『明義進行集』・『広疑瑞決集』と深い関わりをもつことを指摘した。

第二章では、第一章で提示した二系統のうち、『明義進行集』の伝承系統に属する御法語である「十七条②・④・⑤・⑧・⑩・⑫・⑬・⑯・⑰」⁴について検討した。これらの御

法語の内容には一見統一性がみられないが、伝承という視点でみた時、各御法語に共通点が見られることを指摘した。「十七条②・⑬」には、釈尊出世本懷や宗義各別といった教判論が説かれていた。唯一同内容が説かれる「一期物語」の記事より、この内容は、天台僧である公胤からの法然に対する非難が発端となって示されたものであることを明らかにした。当時公胤以外にも、他宗から法然に対する批判があつたことが確認できるが、法然はそれらに対して積極的に反論しているわけではない。

「十七条⑬・⑭」には、称念と観念といった念仏論が説かれていた。この御法語では、「信空伝説の詞」、「明義進行集」信空の項に同内容が示されていたため、信空の人物像に注目した。この御法語のなかでは、源信と善導が比較して示されており、法然は源信の説示を用いることによって、他宗、とくに天台宗に対して説得力をもたせたものである。信空は他宗からの弾圧処理に当たっていたということや、円頓戒の戒師として天台宗に対して発言力や影響力をもっていたことから、この法然の説示をもって他宗からの疑問や批判に対して信空が答えたものという背景があることを明らかにした。

「十七条⑤」には、念仏の修し方と称える際の心構えが説かれていた。『明義進行集』や「信空伝説の詞」との比較から、この御法語は信空の「白河消息」が原本であることを指摘し、そこから『明義進行集』や「十七条⑤」へと伝わっていくという伝承過程を示した。さらに、この御法語の背景には明遍や天台僧覚愉との関連もうかがわれた。明遍と信空は血族的に近く、その一族のなかには、法然教団を守ろうとする血族的な集まりがあつたと考えられる。

「十七条④・⑧」には、念仏と諸行といった念仏論が説かれていた。ここでは、「信空伝説の詞」の説示との関係から、「十七条御法語」と信空の関わりがより明確になる。また「十七条⑤」で注目した覚愉と、廬山寺を通して関係をもつ禅仙や永弁も「十七条御法語」と関連がある人物として注目した。何れも天台僧であるが、これらの質問に信空や明遍が法然の教えをもって答えているという構図をみることができた。さらに、「十七条⑤」の時と異なり、「白河消息」のような原本が確認できないことから、原本の他に、口伝という伝わり方もあることを指摘した。

最後に「十七条⑩・⑫」は、三種行儀について説かれていた。『明義進行集』には、雅成親王が隆寛・明禅・聖覚と、念仏往生に関する質問を書簡にてやりとりしていたことが示され、その質疑応答のなかに「十七条⑩・⑫」の内容が説かれていた。雅成親王は天台教団と深い関わりをもつ人物であり、ここでも天台の立場からの質問に対して隆寛等が法然の教えをもって答えるという背景があることが明らかとなった。信瑞が『明義進行集』を編集する際に、これらの書簡の内容に手を加えることがなく、原本を忠実に記載していることを確認できたことも重要な点である。以上、各条を検討した結果、第二章でみえてくる共通点とは、公胤・源信・覚愉・禅仙・永弁・雅成親王という天台宗との関係が深い人物が関連していたことである。このような天台の思想をもつ者からの質問や批判に対して、信空や明遍、隆寛等が、法然の教えをもって対処し、さらに、その論争に法然自身は関わっていないということを明らかにした。

第三章では、第一章で提示した二系統のうち、『広疑瑞決集』の伝承系統に属する御法語である「十七条①・③・⑭」の三条について検討した。「十七条①」は、第二十願について説かれていた。ここでまず問題となったのが、この説示の真偽である。法然は他の文献で

第二十願解釈を述べることがほとんどない。また、ここに説かれるような、三生、百年の内に往生がかなうという内容はどこにもみられない。これは、田村圓澄氏による真偽判断によれば、偽撰とされるべき内容である。そこで法然門下の文献から関連内容を検索すると、『東宗要』と『広疑瑞決集』の二文献のみに同様の内容が説かれていた。このうち、『広疑瑞決集』に、この内容が信空からの「相伝」であることが明示されている点に注目し、原本から『広疑瑞決集』や「十七条御法語」に伝承される背景を明らかにした。また、信空だけでなく、明遍や南都においてもこの三願というものが重要な問題となっていたことを確認した。真偽に関しては、門下の解釈より、第二十願というものが、そもそも念仏による往生を願体としたものではなく、阿弥陀仏との結縁の強さを示すものであり、阿弥陀仏と一度でも縁を結んだ者は、いつか必ずその願いが果遂し、往生がかなうというものであるととらえることによって、「十七条①」や『広疑瑞決集』に説かれる内容が法然教学として問題がないと結論づけた。同時に、この内容は法然が積極的に自身の教学を示すものとは類を異にし、他者からの質問に対する問答のなかで説かれている点に注目した。

「十七条④」には、第十九願が諸行の人を第十八願にひきこむという、法然教学にはみられない内容が説かれていた。門下の文献のなかでも同内容がみられるのは『広疑瑞決集』のみである点より検討した。『広疑瑞決集』の該当箇所、第二十願と同様に「相伝」であることが説かれている点や、その直前に示される信瑞の詞に注目した。そこには、信瑞の他宗からの批判に対する強い対抗意識があらわされている。そこで分かることは、信瑞には對他宗という意識があり、そのために信空や隆寛といった師から「相伝」された法然の解釈をもって他宗に対抗しようとする構図である。また、ここに挙げられていた批判は、『興福寺奏状』に示される内容と一致することから、南都からの批判であったことが分かる。

「十七条③」には、往生以後、地藏菩薩等が覚りを目指す仲間となるという内容が説かれるが、これも法然教学にはみられない内容であった。そして『広疑瑞決集』のみに同様の説が説かれる点も先の二つの御法語と同様であった。ここで注目したのが、『興福寺奏状』を起草した貞慶や、その教えを引き継ぐ良遍等、南都の間には強い地藏信仰があるということである。つまり、第三章でも、對他宗という意識のなかで、信瑞が信空等によって相伝された法然の解釈によって対処していたという背景が明らかとなった。第二章と異なる点は、この三つの内容は法然教学的に珍しいということと、相手が南都であるということであった。

第四章では、「十七条御法語」のなかで、『明義進行集』系統にも『広疑瑞決集』系統にも属さない五つの御法語について検討した。「十七条⑥・⑦・⑨・⑪・⑮」が該当する。このうち、「十七条⑪・⑮」には、念声は一論と三心論が説かれていた。この二つの御法語の伝承には、ともに明遍と良遍が深く関わっていることを明らかにした。また、『興福寺奏状』や明恵からの批判が意識されていることを確認できた。「十七条⑥・⑦・⑨」には、それぞれ願成就文、第十八願の「至心信樂欲生我国」、就行立信釈について説かれている。本章では、これら三つの御法語に関して、特定の人物や伝承背景を確定することができなかった。これは関連人物が特定できないためである。しかし、教義的には問題がない内容であることを確認した。

第五章では、「十七条御法語」に示される内容と、法然の教義書や他の御法語に説かれる

内容との比較検討を行った。これは第二章から第四章において各条を考察する際に述べてきたことであるが、改めて整理しなおすことによって、「十七条御法語」の思想面における特徴を明確に示すことができた。また、第二節で述べた念仏と諸行に関しては、先学の研究をもとに、法然が「浄土門帰入」という大きな宗教的体験を経て、念仏一行となり、諸行往生を一切認めない立場になるということを明らかにした。各思想について比較した結果、「十七条御法語」は法然教学の枠内にはおさまるものであるが、法然が自ら積極的に示そうとした教学とは趣きを異にする特殊なものであるという特徴があることを指摘した。

第六章では、本論の研究目的である、「十七条御法語」の伝承過程について検討した。その際、「十七条御法語」が現存する形に至るまでを三段階に分けて考察した。第一段階は法然によって「十七条御法語」に説かれる内容が語られた際の背景である。はじめに、「十七条御法語」の伝承に関する重要人物として、良遍の思想や人物像を整理することによって、当時の南都における仏教の問題点を確認した。また、第三章や第四章で注目した『興福寺奏状』や明恵の批判と「十七条御法語」との対応を確認したところ、十七条中、十五条がこれらに対応する結果となった。つまり、これは南都との関係があることをあらわしている。これをふまえて、第四章の最後に検討した伝承不明の三つの御法語のうち、結局「十七条⑥」と「十七条⑦」の二つも南都で問題となっていた教義内容であることが明らかとなった。また、第二章で検討した天台宗との関係を加え、十七条中十六条が他宗との関係を有すると結論づけた。第二段階は信瑞によってこれらの内容が採用された際の背景である。信瑞は師からの「相伝」を正確に伝えるため、原本に手を加えることなく、その相伝をもつて他宗からの批判に対抗していたことを確認した。また、「十七条御法語」は『明義進修集』等から直接伝わったものではなく、それ以前の原本や口伝が想定できることも確認した。そして第一段階の結果もふまえて、「十七条御法語」の成立時の背景を検討した。はじめに「十七条御法語」の並び順については、浄土宗義を学ぶ者を対象にしているのではなく、他宗の者や民衆にとって関心のある内容が前半部に並び、徐々に教義的な内容に導いていくという意図があることを明らかにした。それ故に、浄土宗義からみれば珍しい内容がみられることとなる。続いて、その対象者に関して、「二百四十五箇条問答」を例に、法然の御法語には「A、教義体系を示し、教義の本質を説く類のもの」と、「B、聞かれたから答えたという類のもの」という二種類があることを明らかにした。この背景をふまえずに、Bのみが示される御法語を文面のみで受け止めるならば、非法然的と判断されてしまうのである。それ故ここで御法語が説かれた背景を確認する重要性を指摘した。「十七条御法語」はBにあたるものである。続いて第三段階は、最終的に『西方指南抄』に採用される際と、その後に展開する際の背景について検討した。「十七条御法語」にかぎってみれば、ここに親鸞による意図的な加筆や編集があったとは考えられず、原本が存在し、親鸞はそれを書写したということを論証した。しかし、「十七条御法語」に示される三願解釈や要門・弘願というような理解が親鸞に影響を与えた可能性があることを指摘した。そして最後に、後に『和語灯録』や『四十八巻伝』へと展開する背景について、これまで述べてきたように「十七条御法語」が特殊な背景のなかで成立し、伝統的な法然教学とは異質のものであるということを道光や舜昌等が注意し、誤解を恐れて削除や改変を加え、問題のない形で採用したと推察されると結論づけた。

確かに、「十七条御法語」は法然の詞がそのまま残されたものではなさそうである。しかし、信瑞によるしつかりとした「相伝」によって、法然の思想が確実に伝えられたものであり、完全な真撰とはいえなくても、法然の詞が伝えられたととらえられる、このような種類の御法語もあるということを描きたい。単に法然が対他宗ということと述べたものとして残っているのではなく、その伝承過程に信空や明遍等の多くの諸師が関係し、信瑞によって相伝されていることが重要であり、また何者かの批判に対するため、『選択集』等とは異なる内容が説かれることはあり得ることであると考える。このことについて筆者は、法然の御法語に、教義の本質を説くものと、聞かれたから答えたという二種類の説き方があると指摘し、質的には異なるが、両者とも法然の詞として受けとめてもよいものであるとした。そのうえで、このような背景を考慮することなく、内容のみで真偽を判断してきたこれまでの御法語研究には問題があり、「十七条御法語」は法然の思想が伝えられた遺文として受け取るべきものであることを主張したい。法然の思想を正確にとらえるために偽撰と判断することは重要なことであるが、しつかりと背景をふまえたうえで、法然の思想としてとらえられるものがあることがいえるならば、法然御法語研究、法然研究の幅が大きく広がることになると思う。

¹ 田村圓澄氏『法然上人伝の研究』（法蔵館、一九七二年）参照。

² 中野正明氏『法然遺文の基礎的研究』（法蔵館、初出一九九四年／増補改訂版二〇一〇年）参照。

³ 藤堂恭俊氏『法然上人研究』（山喜房仏書林、一九八三年）、永井隆正氏『西方指南抄』所収「法語十八条について」（『印仏研』四二―二、一九九四年）参照。

⁴ 「十七条御法語」の第二条・四条・五条・八条・十条・十二条・十三条・十六条・十七条を指す。本論に従い、以下同様に表記する。